

インド共産党の分裂 －ネルー評価をめぐって－

高橋 麻里

1964年、インド共産党（Communist Party of India, CPI）は分裂した。本論の目的は、CPI 分裂の要因を探ることにある。CPI の分裂は国際要因と国内要因によっている。

本論は以下のような認識に立っている。まず、中ソ対立は CPI 分裂のひとつの要因である。そして कांग्रेस・システムという当時のインド政治の特性を考慮すると、CPI 分裂の要因はインド国内政治にも求めることができる。中ソ対立が顕在化する以前から CPI には派閥対立が存在していた。CPI の中ソ対立への評価は、それまで続いてきた CPI の根深い対立を顕在化させたと考えられる。本論は CPI 分裂の決定的な要因は国内要因であるという前提にたち、議論を展開している。国内要因とは、すなわち、ネルーの指導力と कांग्रेस・システムである。 कांग्रेस・システムが意味するものは、単なる国民会議派（Indian National Congress, 会議派）統治ではない。会議派による一党優位体制が CPI にとって重要な意味をなしている。共産党が統治する中国や旧ソ連は「一党全体主義システム（One-Party Totalitarian）」に分類される。しかし、インドでは कांग्रेस・システムが続いていた。当時の CPI はその枠組みのなかで活動する議会政党であった。これが CPI の特徴といえる。

様々な背景が CPI 分裂に影響しており、それは多角度から研究されている。しかしこれ

ら先行研究は、CPI のネルーに対する評価が、どのような対立なのか具体的に説明していない。そもそも、インド独立期から CPI 分裂時までのネルー評価における党内対立を一貫して研究しているものは今まで存在しない。筆者はそれを探ることに本論の意義があると考えられる。

ここで共産主義における「右派」と「左派」の定義をしておく。共産主義者は「右派」と「左派」に区別することができ、彼らが社会主義国家を創設するための戦術も「右派」と「左派」の2つの戦術に大別できる。インドのような発展途上国における「右派」は、封建制度と外国帝国主義を共産主義の主要な敵とみなす。一方、「左派」は封建制度や外国帝国主義も敵とみなすが、これらよりも資本主義とその土地のブルジョアジーを主要な敵とみなす。そのため、その国が先進国か発展途上国かは問題ではない。戦術について、「右派」は2段階革命を採用している。右派にとって、革命の第1段階は海外の帝国主義の打倒である。その後第2段階として国内ブルジョアジーの打倒を目指す。しかし、左派は国内ブルジョアジーを倒すことを第1目標としている。

インドは独立以後、 कांग्रेस・システムを維持してきた。 कांग्रेस・システムの崩壊時期についてはさまざまな意見があるが、CPI の分裂がシステム崩壊以前の出来事であることに異論を唱えるものはいない。コング

レス・システムは野党の役割も重視しており、CPIは野党として中央政府の政策決定に影響を及ぼしてきた。そしてこのシステムはCPIが州政権に就くことも可能なほど、野党に寛容なシステムであった。この कांग्रेस・システムへの評価について、CPI内で意見が対立した。右派は कांग्रेस・システムの中で機能することを選択した。一方、左派は कांग्रेस・システムを破壊し、新たな政治システムを創ることを目標とした。共産党が कांग्रेस・システムとは異なる政治システムを目標とするために矛盾が生じ、これら両者の意見の相違は修復しがたいものとなった。

前述のように、CPIは1964年に分裂した。CPI右派と左派の主張が対立したためである。派閥間の対立が最もよく表われるのが、ネルーに対する評価である。ネルーに対する評価の対立は、インド独立問題、ネルーのケーララ問題への対応、対外政策の3つについてみることができる。

第1に独立問題に関して、1950年代初めまでCPI内に対立があった。ネルーはインドの独立を指導し、会議派が中心となってイギリスから独立を勝ち取ったという評価が一般的である。CPIの右派と左派は、このネルーの指導力をどのように評価するかという点について意見が分かれた。右派は、インドの独立はネルーの功績とみなした。また、右派は会議派をネルー派とパテル派の2派閥に分類した。右派は、当時、ネルーが社会主義を目指していたことから「進歩的」とみなし、ネルー政府を評価した。一定の評価のもとで、右派は結果的にネルー率いる会議派との協調を提唱した。

一方、党内左派は独立問題に関して、右派の「親会議派」政策に反対しネルーを批判した。左派の見解は、会議派は依然として大ブ

ルジョアジー政党である、とするものであった。左派は、インドの独立は、イギリスから与えられた「偽りの独立」であるとみなすことによって、ネルーへの不支持を示した。

第2に、ネルーのケーララ問題への対応に関して、CPI内の意見対立をみることができる。1957年ケーララ州議会選挙の結果、CPI州政府が樹立した。共産党が普通選挙を通して政権を掌握することは世界で初めての出来事であった。このCPI州政府の出現はネルーを中心とする会議派の中央政府支配に大きな脅威となった。そして1959年7月にケーララ州に大統領統治が敷かれるまでのCPI統治に対して、会議派は批判や攻撃を与えた。当時ケーララ州政府首相であったナンブーデイリパッドは、ネルーに対し会議派の攻撃を抑えるよう要請したが、反CPI州政府運動は収束しなかった。したがって、CPI内では主張が極端に分かれた。ネルーのケーララ問題への対応に関するCPI内での意見の一致がみられなかったことは注目に値する。右派の意見は静観の態度をとると主張し、左派は会議派の攻撃に、武力を行使して対抗すると主張した。

ネルーのケーララ問題への対応をどのように評価するかということは、 कांग्रेस・システムへの評価に置き換えられる。右派は कांग्रेस・システムの枠内でCPI州政府を存続させる方法を模索した。その結果、会議派以外の野党と同盟を組むことによるCPI主導政府の樹立を目指すこととなった。これが右派の「静観」の態度をとるという主張につながった。右派は、CPI州政府が打倒されても、それは次選挙で会議派批判の材料となると考えたためである。

一方左派は、CPI州政府が共産主義のイデオロギーに沿って機能していくために、コ

ングレス・システムからの脱却を目指した。CPI内でも特に左派にとって、CPI州政府の樹立は、社会主義への「平和的移行」の象徴であり、第1歩であった。右派のように静観の態度を示すことは、社会主義への移行を断念することにつながる。左派はあくまでも社会主義体制の創設を第1の目標と考えたため、ネルーのケーララ州に対する国内政策を支持することはできなかった。

第3の派閥対立があらわれるネルーの対外政策に関しては、対中国政策、すなわち1962年の中印国境紛争がもっとも重要な争点となった。ネルーは当時、非同盟外交を採用していた。中国がインドを侵略した事件に関して、ネルーは欧米に軍事援助を要請し、中国に対抗した。この件に関して、右派は、自分たちは社会主義という目標を追い求めすぎていると自己批判し、ネルーを支持した。一方、左派がネルーに反対する理由は、ネルーは「ブルジョアジー」であり、「倒さなければならない敵」と判断したことにある。したがって、左派はネルーに「反国家」および「親中国」とみなされ、投獄されることとなった。

これまで述べてきたように、CPI内の意見対立は、ネルー評価を争点として展開された。もちろん、これらCPI内両派閥の意思決定において、イギリス共産党やソ連共産党、またコミンテルンやコミンフォルムといった国際組織の影響があったことを無視することはできない。さらに、中印国境紛争に関して述べるならば、中ソ対立の影響があったことも否定できない。国際的要因が派閥対立に影響

を及ぼしたことは確かである。しかしCPIにとって、最重要事項は「民主主義国家において、CPIがどのように機能していくか」ということであった。右派はネルー支持を表明することによって、また、左派は社会主義国家建設をめざすことによって、インドにおけるCPIの立場を守ろうとした。右派にとって、ネルー支持は、共産主義のイデオロギーを放棄してまでも示さなければならない態度であった。一方、左派は、ネルーを支持するのではなく、イデオロギーに沿ってインドに革命をもたらすことが先決だとみなした。これらの意見は、当時のインドの政治体制を反映している。すなわち、 kongress・システムへの評価である。

kongress・システムはインド独立以後に形成された。したがって、CPI分裂に至る党内対立のすべてはインド独立から始まったといっても過言ではない。インド独立を「真の独立」とみなすか「偽りの独立」とみなすかという立場の相違にCPI分裂の根幹がみられる。ネルーのケーララ問題への対応や対中国政策への評価は、インド独立問題に関する評価の延長線上にあるものである。一般的にCPI分裂の要因といわれている中ソ対立は、それまで党内に生じた対立を激化させるものでしかなかった。 kongress・システムからの脱却は、当時首相であったネルーの打倒を意味する。逆説的に述べるならば、当時の政治状況において、ネルー評価はそれ程に重要な意味を含んでいた。したがって、CPIの分裂はネルー評価が決定的な最大要因であった。